



宮城県宮崎町(現加美町)で行われている、普段の家庭料理を持ち寄る「食の文化祭」

結城 登美雄

Written by Tomio Yuki

「国家にとって一番大切なことは何でしょうか？」と弟子たちに問われてソクラテスは、「あらゆる必要の中で、最初の、そして最大のものは、生命と生存のための食料の供給である」とこたえた(プラトン『国家』)。

生きることは、まず食べることから始まる。だが戦後日本は、この第一義のテーマを軽んじてしまった。かわりに鉄と石油による産業国家をつくった。人はパンのみにて生きるに非ず、とばかりに、それを豊かさへの道と信じ邁進した。たしかに豊かさは達成されたかに見えるが、いつも足元がゆらいでいた。

2005年現在、懸命な努力にもかかわらず、わが国の食料自給率は40%のままである。生きる基本たる食料資源を他国や外部にゆだね続けたツケが、食の安全性をはじめとする様々な事件、事象となって噴出し、国民生活をおびやかしている。もはやこの国では、第一義のテーマを国家にまかせられないのではないか。食と農の現状に危機感を抱いた人々を中心に、各地にそんな動きがおきている。「地産地消」もまた、そのひとつのあらわれである。ここで育てられた食べものを、遠くへ運ばず、いま、ここに暮らす人々とともに食べる、という「地産地消」の呼

食を間にはさんだ、新しい関係づくり

びかけが静かに広がっている。広域流通システムが強い、厳しい品質や規格に苦しめられた農家が、その手を離れて、自らの販売拠点を構築した「農産物直売所」は、この10年ほどで全国に1万箇所にも増えた。その担い手の中心は、日本の農政が切り捨てた高齢者と女性たち。形や大きさがちがっても、新鮮でおいしいとかけつけてくれる近隣の人々と出会い、再び農への意欲をとりもどして、その表情はいつでも明るい。そして、これらの営みは推計で2400億円にもなるという。さらに、農産物直売所を拠点にした活動は、例えば岩手県東和町の学校給食のように、その食材の75%を地場のものでまかなうまでになっている。いわば、かつてのあたり前をとり戻す運動が、地域に少しずつ広がり定着をみせている。

生きるための食をテーマに地域づくりをする町がある。宮城県宮崎町(現加美町)。この町は6年前から女性たちが中心になり、普段の家庭料理を持ち寄り展示する「食の文化祭」を続けている。1500世帯から1300品のわが家の一品が集まる壮観な光景。1万人の来場者で交わされる食談議。それまでは、わが町にはコンビニもなければ何もないと嘆いていた町の人々が、今では、コンビニもハコモノもいらぬというほどに変化した。そして、この「食の文化祭」は全国40箇町村の女性たちに受け継がれ、食による地域づくりへと広がっている。

身近によい食べ物を作ってくれる人々がいることの幸福と安心。それは、もうひとつのインフラではないのか。食を間にはさんで交わされるたくさんの会話。バラバラだった地域が、食を通じて、新しい関係を再構築しはじめている。 CEL

結城 登美雄(ゆうき・とみお)

民俗研究家、(有)タス・デザイン室取締役、宮城教育大学非常勤講師。1945年山形生まれ。山形大学卒業後、広告デザイン業界に入る。仙台市において現在は、地元学に取り組んでいる。2004年芸術選奨文部科学大臣賞受賞(芸術振興部門)。著書は、『山に暮らす海に生きる:東北むら紀行』(無明舎出版)など。